いのちの栞

如来とわたし

安藤　光慈

目次

仏と如来……4
善と悪……8
光とかたち……12
逆謗（ぎゃくほう）と摂取（せっしゅ）……16
縁と恩……20
忌と会……24
誓いと願い……28
利益（りえき）と利益（りやく）……32
「救い」と「さとり」……36
心と思い……40
文字と音……44
「信じる」と「疑う」……48

仏と如来

シッダールタとは呼ばない

お釈迦さまの呼び名

さとりを開かれたお釈迦さまのことを何と呼ぶべきかについて、お釈迦さまは、ともに苦行をしていた五人の仲間からの問いかけに「あえていえば、ブッダとしか言いようがない」と明かされたといいます。つまり、以前のように「シッダールタという名前で呼んではいけない」というのです。名前というのはそれが何者であるかを表すものであり、言い方を変えれば分別し限定する役割を持っていますが、さとりを開かれたお釈迦さまはそうした何者にもあてはまらないということです。

ほとんどの仏典では、お釈迦さまのことを名前ではなく、「仏」あるいは「世尊」と表記しています。しかしその他にもお釈迦さまの尊さを表現するのにさまざまな尊称が用いられることもあります。それらは併記して用いられることもあるのですが、まとめて仏の十号・如来の十号といいます。具体的には如来・応供（阿羅漢）・等正覚・明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・仏世尊というものですが、その呼び方や数え方には諸説があるようです。このうち「仏」の他に私たちに馴染みが深いのは「如来」ですね。

「如来」とは、真如（しんにょ）（さとりの世界）より現れ来たったものという意味です。ブッダを音訳したものが「仏（仏陀）」ですが、こちらはさとったもの・真理に目覚めたものの意ですから、「如来」と「仏」とでは表そうとしている内容に、ニュアンスの違いがあるように思います。例えば、「仏に成る」とはいいますが、「如来に成る」とはいいません。一方、ご本尊としては、「○○如来」と表されることが多いように思います。さとりの世界から私たちを救いとるために現れてくださったという意味をこめてのことでしょう。

このように、どちらを用いるかは私たちがどのような思いでお釈迦さまや阿弥陀さまのことを表現しようとしているかによります。また、お話をする場合には、引用したお聖教（しょうぎょう）にどのように表現されているかということも関係してきます。私自身は「仏さまが……」等と話すことが多いように思いますが、言葉を使う人の性格も関係しているかもしれません。いずれにしても、お釈迦さまや阿弥陀さまを表現するのに多くの言葉が存在するのは、仏さまに対する私たちの思いのゆたかさが反映されているのだともいえるでしょう。

こうしたことは他の言葉にも当てはまります。例えば、「他力（たりき）」「本願力（ほんがんりき）」「仏力（ぶつりき）」という言葉は同じ仏さまのはたらきを表していますが、それぞれ表現したいところが異なっています。本書では、各章ごとに異なる二つの言葉を「AとB」という形で提示しています。その二つの言葉は、同義語であったり対義語であったり、一見関係のないような言葉であったりしますが、その二つの言葉の間にある何かをお話ししていきます。